

# 日本語学習者は非デスマス形の待遇レベルをどう認識しているか

岡崎渉（鳴門教育大学） 濱田典子（秋田大学） 西條結人（広島大学）

## 1. 本研究の目的

デスマス形・非デスマス形というスタイルは、丁寧・非丁寧という対立で捉えられやすいが、非デスマス形にはいわゆる「タメ口」と認識されるような非丁寧なスタイルばかりではなく、目上の人との会話でも使われるような中立的なスタイルも混在している。日本語母語話者は普段これらの待遇レベルが異なる非デスマス形を使い分けているが、日本語学習者は両者の区別ができていのかどうか、その認識の実態は明らかになっていない。そこで本研究では、日本語学習者が非デスマス形の待遇レベルをどのように認識しているのか明らかにすることを目的に調査を行った。

## 2. 問題の背景

### 2.1 日本語母語話者によるスタイルの運用

一般的に、デスマス形は相手への丁寧、フォーマルな態度を表し、非デスマス形は相手への非丁寧、親しみの態度を表すとされ、これらは相手との関係や場面によって使い分けられるものとされている。だが、非デスマス形は常に非丁寧であることを表すわけではない。これに関して野田(1998)は、非デスマス形を「中立形」と「非ていねい形」に分けている。「中立形」は主に聞き手が意識されない発話である「心情文」や「従属文」で用いられ、デスマス形基調の談話でもしばしば混用される。「非ていねい形」は相手を丁寧に待遇しないことを意味するため、デスマス形基調の談話では通常用いられない。Cook(2002)はさまざまな談話データの調査にもとづき、非デスマス形にはインフォーマルスタイル(IF)とインパーソナルスタイル(IP)が混在するとしている。IFは終助詞や文末の上昇音調、母音の引き伸ばし、倒置、音の縮約といった *affectkey* と呼ばれる要素が共起することで、聞き手に対する話し手の態度や気分、対人関係に関わる情意を表すため、近しい関係の相手に用いられる。IPは主に終助詞などの情意を表す要素が共起していない裸の非デスマス形が用いられ、話し手の意識が聞き手よりも発話の情報内容に向けられていることを表す。以上のように、非デスマス形には聞き手目当て性が異なるスタイルが混在しており、その違いによって待遇レベルは異なっている。

### 2.2 学習者によるスタイルの運用

日本語学習者は非デスマス形について、そのような区別をしているのだろうか。多くの日本語学習者用の教科書において非デスマス形は、友人や家族、目下の人と話すときのカジュアルなスタイルであるといった説明がなされている。日本語学習者は日本語を通常デスマス形で学ぶこともあり、教科書の学習だけでは非デスマス形を正確に理解する機会は得られない。

学習者によるスタイルの運用実態を見た研究では、日本での生活を経ることでスタイルの運用は変容することが示されている(McMeekin, 2014 等)。一連の研究では、当初の会話ではおおむねデスマス形を用いていた学習者でも、必ずしも母語話者同様ではないものの、非デスマス形を用いるようになったり、規則的なスタイルシフトを行うようになったりしたことが報告されている。しかしながら、日本在住の学習者でも、デスマス形基調の会話において失礼な印象を与える非デスマス形の使用も見られる。それは、終助詞「ね／よ」が付加された「感情表出」(例:「すごいね」「しんどいよ」)を用いたり、「独話的発話」として行うべき発話が聞き手目当ての発話になったりすること(例:何かを思い出すときの「なに?」「なんだった?」)(岡崎, 2016)、あるいは質問に答えるとき、「です」を省いて発話したり、相手の質問をそのまま非デスマス形で繰り返して答えること(McMeekin, 2014 等)などである。デスマス形基調の会話において、こういった聞き手目当ての非デスマス形を用いれば失礼に聞かれるおそれがあるのだが、学習者はそのような認識をもたずに用いている可能性が考えられる。

### 2.3 学習者によるスタイルの認識

学習者の非デスマス形に対する認識について、聞き手目当て性の観点から調査した研究に上仲(2016)がある。上仲は台湾の大学で日本語を専攻する1年生～3年生191名を対象に、後輩が先輩とデスマス形で話している会話文のテキストを用い、後輩のいくつかの発話においてデスマス形と非デスマス形のいずれかを選ばせた。調査の結果、聞き手目当て性が高い発話(依頼/質問/謝辞)では大半の学習者がデスマス形を選び、聞き手目当て性が低い発話(感情の直接表出/独話/確認のための繰り返し)では多くの学習者が非デスマス形を選んだ。だが、上仲の調査では一方のスタイルを選ぶよう指示されて

いるだけで、学習者はどのような基準で一方を選んだのかわからない。また、非デスマス形の聞き手目当て性は、終助詞の有無や、質問への応答かどうかという点によっても異なってくるが、上仲の調査では考慮されていない。

終助詞が付加された非デスマス形の認識については、佐藤・福島(1998)で調査されている。佐藤・福島は、さまざまな母語の上級学習者 30 名を対象に、非母語話者が母語話者と対談しているテキストを用い、デスマス形基調の非母語話者が用いるさまざまな文末形式の自然さを 4 段階で評価させた。その結果、学習者は同じく調査対象者となった母語話者よりも、シフトされた発話である「ね」「よ」の付加された非デスマス形を不自然とは見なさない傾向が示された。この結果は、学習者は非デスマス形に対して母語話者と異なる認識を抱いていることを示唆するが、どのような場合の発話における非デスマス形に対し、その丁寧さ・失礼さをどのように認識しているのか具体はわからない。

## 2.4 研究課題

学習者は、非デスマス形の聞き手目当て性にもとづく待遇レベルの違いを正確に認識できていない可能性が考えられる。その認識が母語話者と食い違っていれば、相手の用いた非デスマス形が心理的接近を表すものなのかどうか半別できなかったり、自分の用いた非デスマス形が意図せず失礼な言い方になってしまったりするおそれがある。そこで本研究では、学習者は非デスマス形の聞き手目当て性にもとづく待遇レベルの違いを認識しているのかどうかを調査した。

## 3. 方法

### 3.1 調査協力者

調査は、日本の大学または大学院の留学生である中上級以上の日本語学習者 63 名を対象に行った。年齢は大半が 20 代であり、母語は多くの者が中国語で 53 名だったが、韓国語が 4 名、インドネシア語、タイ語が各 2 名、英語、モンゴル語が各 1 名含まれていた。日本語能力については、日本語能力試験 N1 保持者が 31 名、N2 保持者が 14 名であったが、その他の 18 名も普段日本語での授業に参加しており、所属機関または担当教員である著者らによって N2 以上のレベルに相当すると判断されている。日本滞在歴は半年未満が 15 名、半年～2 年が 10 名、2 年～4 年が 25 名、4 年以上が 10 名であった（3 名が不明）。比較対象として、18 歳以上の幅広い年代の母語話者 30 名にも同様の調査を行った。

### 3.2 材料

非デスマス形の待遇レベルの認識を測るためには、実際に非デスマス形を評価してもらうのがよいだろう。そのためには、発話単体だと個人によって想定される文脈が異なるため、会話者間の関係性や場面を統制した会話で用いられる非デスマス形を評価してもらう必要がある。そこで、大学での学生と指導教員による短い会話文を作成し、学生の発話において聞き手目当て性の異なる 2 つの非デスマス形を提示し、評価してもらうこととした。調査は Microsoft 社の Forms を用い、オンラインで行った。会話文において、学生は基本的にデスマス形を、教師は非デスマス形を用いているが、学生による (1)「感情表出」、(2)「独話的発話」、(3)「質問への答え」において、聞き手目当て性の強い非デスマス形と弱い非デスマス形を提示し、それぞれの待遇レベルを 4 段階で評価してもらった。(1)(2)(3)は先行研究のデスマス形会話において、学習者に不自然な使用が見られた非デスマス形である。また、(3)は発話連鎖上の位置による違いを見るものだが、(1)(2)はスタイルによる違いを見るものであるため、デスマス形も評価対象に加えた。教示文は、「以下の会話は、20 歳くらいの日本人学生が、指導教員（40 代）である先生の研究室を訪れたときの雑談です。学生による下線の言葉の使い方は失礼だと思いますか。1～4 で回答してください。【1. 失礼だとは思わない／2. 少し失礼だと思う／3. 失礼だと思う／4. とても失礼だと思う】」とした。会話文は(1)を 2 種類、(2)を 8 種類、(3)を 2 種類の全 12 種類作成した。以下に(1)(2)(3)それぞれの説明と会話例を示す。

#### (1) 「感情表出」(会話文①②)

率直な感情を表す「感情表出」における非デスマス形は、デスマス形基調の会話でも用いられやすいが、それは聞き手目当て性の弱い裸の非デスマス形などで発話されるためである。評価対象となる発話には、裸の非デスマス形に加え、聞き手目当て性の強い「ね」が付加された非デスマス形、さらにデスマス形を提示した。下線部が評価対象の発話である。

①先生：英語の試験なら、私は大学 3 年生のときに TOEFL で 100 点取ったよ。

学生：えー、すごい／すごいね／すごいですね。留学もされてたんですか？

#### (2) 「独話的発話」(会話文③～⑩)

「独話的発話」は聞き手目当て性が弱いので、デスマス形基調の会話でも用いられやすいが、それは「だ」「な」「か」の付加など、独話的発話であると理解される形式で発話されるためである。評価対象となる発話には、「だ」「な」「か」が付加

された独話的発話に加え、聞き手目当て性の強い「ね」が付加された非デスマス形、さらにデスマス形を提示した。

④先生：明日のスポーツ大会は、雨が降ったら中止だよな？

学生：そうですね。（PCを見る）あ、明日雨だ／雨だね／雨ですね。これじゃ、明日は無理ですね。

### (3) 「質問への答え」(会話文①a, b, ②a, b)

「質問への答え」は必然的に聞き手目当て性の強い発話になるため、デスマス形基調の会話では非デスマス形を用いると失礼になりやすい。類似した2つの会話文を作成し、一方は質問への答えとなる非デスマス形（①a, ②a）を、もう一方は質問への答えではない場合の聞き手目当て性の弱い非デスマス形（①b, ②b）を提示した。

①a【先生が買ってきたお土産の食べ物を学生が食べている】

先生：それ、おいしい？

学生：おいしい。

先生：ほんと？

学生：はい、すごく食べやすいです。

①b【先生が買ってきたお土産の食べ物を学生にあげている】

先生：これも食べてみて。

学生：（食べる）あ、おいしい。

先生：ほんと？

学生：はい、すごく食べやすいです。

評価をしてもらった後、非デスマス形の認識を詳しく把握するために、学習者には対面でのフォローアップ・インタビューを、協力の得られた13名に対し行った。インタビューでは、その学習者の回答と一緒にしながら、「なぜそう思ったか」、同じ設問の2つの非デスマス形の丁寧さは「どう違うと思うか」といったことを尋ねた。

## 4. 結果と考察

母語話者30名と学習者63名による評価の平均値と標準偏差を、発話のタイプ（「感情表出」「独話的発話」「質問への答え」）別にまとめて表1に示す。4段階評価による回答であるため、平均値については、4に近いほど強く失礼だと見なしていることを、1に近いほど失礼だとは見なしていないことを示している。

表1 各スタイルの評価結果

|                      |                  | 母語話者 (n=30) |      | 学習者 (n=63) |      |
|----------------------|------------------|-------------|------|------------|------|
|                      |                  | M           | SD   | M          | SD   |
| (1)感情表出<br>(会話文①②)   | 裸の非デスマス形         | 1.83        | 0.95 | 2.52       | 0.97 |
|                      | 非デスマス形+「ね」       | 3.23        | 0.86 | 2.52       | 0.95 |
|                      | デスマス形            | 1.12        | 0.32 | 1.24       | 0.55 |
| (2)独話的発話<br>(会話文③～⑩) | 非デスマス形+「だ／か／な」   | 1.73        | 0.81 | 2.49       | 0.97 |
|                      | 非デスマス形+「ね」       | 3.17        | 0.89 | 2.45       | 0.88 |
|                      | デスマス形            | 1.02        | 0.10 | 1.17       | 0.45 |
| (3)質問への答え<br>(会話文⑪⑫) | 質問への答えとなる非デスマス形  | 2.52        | 1.05 | 2.26       | 0.84 |
|                      | 質問への答えではない非デスマス形 | 1.45        | 0.65 | 1.94       | 0.85 |

非デスマス形に対する評価結果は、母語話者と学習者の間で異なっているようである。そこで、12種類の会話文で用いた24項目の非デスマス形それぞれに対する評価結果に、母語話者・学習者間で有意差が見られるかどうかを調べるため、マン・ホイットニーのU検定(両側検定)を有意水準5%で行った。その際、統計的多重性の問題を回避するため False Discovery

Rate(FDR) 補正を適用した。その結果、22項目で有意差が認められた。有意差が認められなかった2項目はいずれも「質問への答えとなる非デスマス形」であった。学習者は聞き手目当て性の弱い非デスマス形については、母語話者よりも失礼だと捉えており、聞き手目当て性の強い非デスマス形については、母語話者ほど失礼だとは捉えていないことがわかる。

次に、母語話者・学習者それぞれの評価結果について、12種類の各会話文における、聞き手目当て性の強い非デスマス形と弱い非デスマス形の間に有意差が見られるかどうかを調べるため、ウィルコクソンの符号順位検定（両側検定）を有意水準5%で行い、FDR補正を適用した。その結果、母語話者にはすべての会話文における非デスマス形に有意差が認められたが、学習者に有意差が認められたのは「質問への答え」の会話文⑩のみであった。母語話者は非デスマス形の待遇レベルをはっきりと区別しているのに対し、学習者は特に「感情表出」と「独話的発話」において、その傾向が見られないことがわかる。学習者による聞き手目当て性の強い非デスマス形と弱い非デスマス形への評価は、その平均値だけを見ると近似しているが、かといって両者に同じ数値を回答する者ばかりだったわけではなく、「質問への答え」の会話文⑩を除くすべての会話文において、過半数の者が異なる数値を回答していた。だがその場合も、母語話者のように聞き手目当て性の強い非デスマス形のほうを失礼と評価する傾向は見られず、聞き手目当て性の弱いほうをより失礼と評価する者も多かった。

以上の学習者による結果について、滞日期间および日本語レベルとの関連を調べたところ、滞日期间が長い者、あるいはN1の保持者のほうが、そうでない者より母語話者の評価にやや近い傾向が見られた。しかし、それでも聞き手目当て性の異なる非デスマス形への評価に母語話者ほど明確な差があるわけではなかった。また、調査対象者に含まれていた韓国人学習者は4名のみだったが、いずれも日本語母語話者と回答傾向が近かったことから、母語である韓国語の影響が示唆される。

学習者へのフォローアップ・インタビューでは、非デスマス形について、母語話者と同様に聞き手目当て性により待遇レベルを区別している学習者も一部に見られた一方で、その認識は個人によってさまざまであることがわかった。例えば、非デスマス形+「ね」は、「ね」が付くことで失礼さが緩和されるという者や、親しければ先生にも使えるという者がいた。「すごいね」などの評価発話は、話題の人物である学生に対する評価なので失礼ではないという者や、独話的発話の「か」は問いかけに用いる「か」と同じなので失礼だという者、質問に対し相手の発話を繰り返して答えるときは非デスマス形でも失礼ではないという者もいた。また、聞き手目当て性の異なる非デスマス形の丁寧さの違いについては、よくわからないという回答もしばしば聞かれた。母語話者と比べ、学習者による聞き手目当て性の強い非デスマス形と弱い非デスマス形への評価にはほとんど差がなかったことから、多くの学習者にとって、非デスマス形の待遇レベルの認識は曖昧なようである。

## 5. まとめ

日本在住の学習者であっても、その多くは母語話者と違い非デスマス形の待遇レベルの認識は曖昧であり、さまざまな独自の認識を抱えていることがわかった。特に「感情表出」と「独話的発話」に母語話者との差が見られたことから、終助詞の有無とその種類による違いが影響していると考えられる。この点についてはさらなる調査を要するが、本研究では、非デスマス形の聞き手目当て性とそれに伴う待遇レベルの違いは、目標言語環境であっても自然に習得することは難しいことが示された。そのため、日本語教育において非デスマス形の待遇レベルの違いについて学ぶ機会を設ける必要性が示唆される。

**付記** 本研究はJSPS 科研費 JP24K16105（「日本語学習者のスピーチスタイルに対する自律的学習を促す指導法の開発」）の助成を受けた。

## 参考文献

- Cook, H. M. (2002). The social meanings of the Japanese plain form. In Akatsuka, N., & Strauss, S. (Eds.), *Japanese/Korean Linguistics*, 10, 150-163, Stanford, CA: CSLI Publications.
- McMeekin, A. (2014). Japanese learners' indexical uses of the da style in a study abroad setting. *Japanese Language and Literature*, 48, 1-38.
- 野田尚史 (1998). 「ていねいさ」からみた文章・談話の構造 国語学, 194, 102-89.
- 岡崎渉 (2016). 日本語の雑談における母語話者と上級学習者によるスタイルシフトの研究—非デスマス形の指標的機能の観点から— 博士論文 広島大学
- 佐藤勢紀子・福島悦子 (1998). 日本語学習者と母語話者における発話末表現の待遇レベル認識の違い 東北大学留学生センター紀要, 4, 31-40.
- 上仲淳 (2016). 「聞き手目当て」性に基いたスピーチレベルの習得—台湾の日本語学習者を対象に— 三牧陽子・村岡貴子・義永美央子・西口光一・大谷晋也(編) インターカルチュラル・コミュニケーションの理論と実践 くろしお出版, pp.257-273.